

【論文】

愚かさと愛—チェーホフの『可愛い女』について

秦 野 一 宏

「愛は理性を欠いており、われわれを浸食し、われわれを傷つけるが、しかし、私は愛のうちに生きのびるのである」
—レヴィナス（合田正人訳『時間と他なるもの』）

1. 最初の構想

チェーホフは彼の女主人公オーレンカが、読者に滑稽な印象を与えると考えていた。『桜の園』や『三人姉妹』をコメディだと考えるチェーホフは、ここでも「ユーモラスな短編小説」を書いたと信じ込んでいたのである¹。もちろん、それはそれでいいのだが、問題は「ユーモア」の質にある。『桜の園』や『三人姉妹』の滑稽さは真剣さを排除するものではないけれども、『可愛い女』においてもチェーホフは笑いながら真剣なことを語っている。無理やり笑っているわけではない。笑いながらでなければ語れない真剣なこともあるのだ。

チェーホフが『可愛い女』（1899）の最初の着想を得たのは1893年から94年にかけての頃だったようだ。当時の彼の「手帖」には、後にオーレンカに成長する女主人公についてこんなふうに記されている。

「役者の妻がいた。芝居を愛し、作家を愛していたが夫の仕事に没頭しているようすだ。みんなは彼がいい妻をもらったものだと言った。しかし夫は死んでしまう。彼女は菓子屋に嫁ぐが、するとジャムを作ることが何よりも好きなのが分かった。そして芝居を軽蔑した。自分の二度目の夫のまねをして信ふかなくなったからだ²」

完成稿では、オーレンカはまずチボリ遊園の経営主であり劇場小屋の支配人であるクーキンに嫁ぐ。見栄えのせぬ風貌で愚痴ばかりこぼしている男であったが、それでも彼は彼女に「本物の深い感情」を呼び覚ました。彼女は夫の仕

事を助け、かいがいしく働いた。「大衆には道化芝居が必要なよ」と彼女はみんなによく言っていたが、これはまさに、自身の＜高尚な＞芝居が客を呼べないことに苛立つ夫の言葉の受け売りである。「幸せな」結婚生活が10ヶ月ほどつづいた。ところがある日、夫は一座を募集に行った旅先でぼっくり死んでしまう。次に彼女が結婚するのは「手帖」に記された菓子屋ではなく、隣人の材木倉庫の管理人プストヴァーロフであった。彼はまじめで落ち着いた物言いをする信心深い男だったが、結婚後オーレンカも彼そっくりのまじめくさったものの言い方をするようになり、信心深くなって彼といっしょに教会へ通いはじめる。彼女の最大の関心事はもう材木に関連したことになり、話す内容もいつも材木のことばかり。かつてこの世で一番すてきなもの、一番必要なものだと絶賛していた芝居については、「芝居なんて何かいいことありまして」とそっけない反応を示すようになっていた……。とこのように書いてくると、完成稿はまるで「手帖」の内容を少し肉付けただけのように見える。じっさいオーレンカの出会いが「手帖」のように二人目の夫で終わり、獣医との恋がなく、長い空虚な期間とサーシャとの出会いもなかったならば、おそらく『可愛い女』はイロニー含みの滑稽小説で終わっていただろう。イロニーは、夫の死によってすべては変わったようにみえるが、その実、何も変わっていないというところにある。夫が死ぬのはオーレンカのせいではない。それはあからさまに言ってしまえば、チェーホフという作家の作った「偶然」であるが、この「偶然」が彼女の反復を際立たせることになる。たとえば、クーキンと暮らしている時は мы с Ванечкой（「わたしとワーネチカ」）が彼女の口癖で、それがプストヴァーロフと暮らしはじめると、мы с Васечкой（「わたしとワーセチカ」）となる。一文字の違い（н と с）は違いではなく、逆にほとんど変わらないことを強調する。このような反復はそれだけでも読者の笑いを誘うが、語り手のオーレンカに対する態度もさらに笑いを助長する。語り手は、すでにクーキンとの出会いの段階でオーレンカのことを、しよっちゅう人を好きになっている気の移りやすい女として読者に紹介している。

「彼女はつねに誰かを愛していたが、そうせずにはいられないのであった。以前はパパが好きであったが、そのパパは病気で、暗い部屋の肘掛け椅子にす

わりこんで、苦しそうに息をしている。叔母さんを好きになったこともあったが、その叔母さんはときたま年に二度ほど、ブリュanskからやってくるのであった。それよりもっと前、初等女学校で学んでいた時には、フランス語の男の先生を好きになったこともある³」

この一節は、オーレンカがクーキンを好きになったことの最大の説明になっている。パパ、叔母さん、フランス語の先生、この思い出の中の三人とクーキンを分かち合えるものは何もない。彼女がクーキンの不幸に心を動かされて、恋をしたとしても、クーキンには他の好きになった人たちと比べて特別なものは何もない。クーキンに対しては「本物の深い感情」が湧き上がって来たのだと言われても、同じような感情は過去においてパパや叔母さん、フランス語の先生に対してもきっと抱いていたのだろうと、読者は思ってしまう。

しかし、同じことがさらに執拗に繰り返されてゆくうちに、反復の意味そのものが変わってゆく。

後半部分では二人目の夫の死後、オーレンカは愛の対象として獣医のスミルニンと、さらに時を経て彼の息子サーシャともく出会うことになる。オーレンカ自身はかつてのようにはあいかかわらず、好きになった相手の受け売りを続けていて、そこに何も変わったことがあるわけではないが、語り手が彼女を新たに発見するといえはよいのか、オーレンカを見る視線が決定的に異なってくる。「誰かに打ち込まずに1年と暮らせないのは明らかであった⁴」。「彼女の求めているのはそんなもの〔飼猫のブルイスカの示すような愛情〕だろうか。彼女のほしいのは自分の全存在を、頭も心もすべてぎゅっとつかんでくれるような愛であった⁵」、「ああ、彼女はどんなに彼〔サーシャ〕を愛していることか！彼女が覚えた愛着の中には、これほど深いものは一つとしてなかった⁶」、等々。語り手は彼女を突き動かす力、その膨大なエネルギーの存在に驚き、認識を新たにしてく。その態度の変化がオーレンカという存在全体の再解釈と結びつくところに、この小説の最大の特徴がある。

とはいえ、多くの読者・研究者はあくまでこのメモの構想の段階、小説の前半部分の軽い調子によってオーレンカのイメージを固定し、それに則って全体を読もうとする、あるいは読んでしまう。例えばラクシンによれば、「チェーホ

フのオーレンカは臆病な存在でおとなしく、あらゆる点で運命に従順であった。彼女には思想においても意見においても仕事においても主体性が欠けている。彼女には夫の劇場支配人や材木商人の関心以外の関心がない。オーレンカの生活上の理想は単純だ。平安、夫が順境にあること、静かな家庭生活の喜び、『甘いパンといろんなジャムつきのお茶……』⁷。あるいはボルシスキイによれば、オーレンカの性格の特徴は、外的な条件しだいでその「いいなりになること」にある⁸。精神的関心は欠如しているか、あまりにも貧しく、何かを外側から吹き込んでくれる人間が傍らにいないければ、内的世界は空っぽだというわけだ。

2. 二つの異なる解釈

ラクシンのオーレンカ批判にもう少し耳を傾けてみよう。彼は言う。「どうしてオーレンカは自分の以前の愛情といともたやすく離れてしまうのか、どうして去ってしまった近い人についての悲哀は深くなく、愛は揺るぎないものではないのか。好意に対してすぐに反応する彼女の軽薄な心は、何によっても簡単に充たされるからっぽの容器のようだ。以前の偶像と手を切ると同時に、彼女は同じように誠意をもって無意識的に＜自身の願いを新しい偶像に移す＞のだ⁹」。

ラクシンはそこに、オーレンカに対する作者の「悪意あるイロニー」を読みとるわけではない。彼が主張するのは、作者は軽薄で生気のないオーレンカの単調な生を憐れみ、同情しているということなのだ。キーワードは「軽薄」である。しかしこのように安易に、オーレンカを軽薄な女だと断定してしまっているものか。そもそも軽薄とは何なのか。クーキンを埋葬した日には、オーレンカはまったく傍目も気にせず、「往来や隣近所の中庭まで」聞こえるほど「声を限りに号泣した」。—この嘆きは芝居気たっぷりのようにみえるが（またそうみえるように描かれているが）けっして大向こうを狙った演技ではない。彼女は全身全霊を持って＜単純に＞クーキンを愛したのである。3 カ月して、彼女は自身を慰めてくれた材木倉庫の管理人プストヴァーロフに恋心を燃え上がらせる。「彼女は彼を愛したが、それがまた一通りや二通りの愛しようではなく、その晩はまんじりともせずにまるで熱病にやられたように熱くなり、朝になると、例の年輩の婦人を呼びに使いを走らせるという騒ぎだった¹⁰」—その情熱、人

を愛する力に目を見張ることなく、自身の感情を制御できないことだけをことさらに取り上げて、軽薄な行為であると言ってしまうていいものか。3 カ月という間隔が短すぎるというのか。あるいは夫が死んだら、死んだ夫に貞節を守りつづけて二度と結婚しなかったり、その辛さに耐えきれず自分も死んでしまえば、愛情深い人だったときっと拍手喝采されるのだろう。しかしそれこそ、古今東西むかしからあるお涙ちょうだいの通俗ではないのか¹¹。

たしかにオーレンカの行為は尻軽ととられかねない一歩手前のところまで行っているが（事実、語り手は最初、そちらに力点を置いて語っていた）、そこまで行くところがまたく生きている>という実感を呼び起こす。強く現在を愛する者だけが過去を忘れることができる。あるいは、神様は悪いこともあるように、いいこともあるように世界をお創りになったという『流刑地にて』のタタール人の素朴な世界感覚を想い起こしてもよい。感情の振幅の激しさは生きた証であって、何もない、ただの無感動の連続よりも遥かに意味深い。悲しいこともあり、うれしいこともあってはじめて、確かに生きたという実感としての生がそこに現出するのではないか。

また単純な理想しかもてないからと言って、オーレンカの生活を見下ろしているラクシンの姿勢にも問題がある。その姿は、『グーゼフ』のパーヴェル・イワーノヴィチや『中二階のある家』のリーダ、『桜の園』のトロフィーモフに似る。高邁なイデーを持っていると自負して止まぬ彼らは、自分たちと同じようなイデーをもたない者を憐れんだり、軽蔑したりする。もちろん高邁な理想をもつこと自体を否定するわけでは毛頭ないが、そのような理想、イデーがすべてなのか、生の根源なのかと問いたくなる。去ってしまった人に対して悲哀は深くないと、どうして断定できるのか。ラクシンの見方をもう少し極端にするとゴーリキイの見方になる。「見たまえ、灰色のねずみのように可愛い女がそわそわと走り回る一愛すべき、やさしい女、あのように奴隷みたいに、あのように人を愛する術を知る女、あれは頬つぺたを殴ってみたって大声を立てることもできないだろう。やさしい奴隷だ¹²」。どの角度から見るか。一プロテストこそ生の最高の価値だという見方からすれば、たしかに「奴隷」という軽蔑的な見方もできないことはない。しかし奴隷は強制されるが、オーレンカと「強制」は全くの無縁だ。彼女は強いられて人を好きになるわけではない。模倣に

しても、自ら知らないうちに模倣してしまっているのだ。子が親の癖をまねる、あるいは敬愛する人のしぐさは、無意識的にまねられるものであるが、オーレンカの模倣はこれに近い。ついまねてしまうほど、それほどオーレンカは身も心も相手に打ち込んでいるのだ。

発表直後から、意見は二つに分かれていた。どうしてこのような女を取り上げたのか分からないと怒りを露わにする者や、ゴーリキイのようにこんな女は「奴隷」だとかき下ろす者もいたけれども、逆になんと彼女は魅力的なんだと感嘆の声をあげる者もいた。すでに触れたラクシンは一方の意見の代表者であり、もう一方の代表者には、トルストイとパペルニイがいる。

トルストイは『可愛い女』を絶賛した。「クーキンの苗字も滑稽だ、彼の病気も、彼の死を伝える電報すら滑稽だ、謹厳実直な性格の木材商人も滑稽だし、獣医も滑稽、男の子も滑稽だが、全存在をもって愛する人に身を捧げる能力をもつく可愛い女>の心は聖なるものであり、驚くべきものである¹³」と彼は言う。トルストイにとってオーレンカは献身の権化であるが、ただし全面的に彼女を肯定しているわけではない。「彼女は愛することはできるが、選ぶことができず、一切を無駄にした¹⁴」と、オーレンカの否定的な側面にも彼は言及している。鋭い指摘であるとは思いますが、しかしながら、オーレンカにもし人を選ぶ能力がそなわっていて、クーキンのような金勘定に明け暮れる者を俗物として拒否することができたとしたら、そして結果的に自身の愛が無駄かどうかを検証するようであれば、それはそれで愛に功利的な要素が混入することになり、彼女はもう「可愛い女」ではなくなってしまうだろう。

トルストイは何度も彼のもとを訪れる客たちにこのチャーホフの小説を読んで聞かせ、自身の文集『読書の環』(1905年)にも再録している(後述するように一部、気に入らないところをカットしてはいたが)。トルストイのようにオーレンカの肯定的側面に力点を置いて語っているのが、パペルニイである。彼は言う。「滑稽な人物として考えられた可愛い女は、感情の点で貧しい彼女の人生の同伴者たちにはない無欲を、その魂のうちに秘めていることでこの作品の女主人公たりえた。彼らから意見や判断を借りはしたが、その代わり、彼女は彼らに自分のすべてを余すところなく捧げた¹⁵」。

クーキンに恋したのも、獣医に心を寄せたのも、どちらも相手の不幸への同情からはじまった。それは他人の苦しみに対し彼女がすぐれた感能力をもっている証左であろう¹⁶。彼女の同情は、上から見おろした憐れみではけっしてないが、かといって、彼女の無私的な愛を強調するあまり、それを聖なるものとするのもまた極端すぎるのではないだろうか。オーレンカはけっして聖女ではない。

3. オーレンカの「空虚」

愛さずにはいられないオーレンカが愛せなくなったらどうなるのか。ひと言で言うと、彼女は空虚に陥った。その陥った空虚の凄さが逆に、彼女にとって愛することがいかに重大なことであったかを示している。彼女の空虚を目の当たりにすると、「愛さずにはいられない」という<軽い>言葉はとてつもなく<重い>意味をもつようになる。

6年間の幸せな生活のあとプストヴァーロフが死に、その後、愛した獣医ミルニンともオーレンカは別れる羽目になる。愛する対象がなくなった彼女の世界は茫洋とし、芯がなくなる。彼女は痩せ、器量も落ちる。人々は彼女にかまわなくなり、もう微笑みかけもしない。オーレンカの心の中はがらんどで、夢に見るのも空虚な荒れ果てた、がらんどの中庭だけである。ときおり、信心深かったかつての夫のことを突然思い出したりはするけれど、そのような思い出もすぐに潮の引くように掻き消え、生きる力を与えてはくれない。絶望もない、苦悩すらなく、人と話す気にもならない。そこにあるのはもはや「オーレンカの世界」というものではなく、単なるモノの集積した空間でしかない。時間は無関係に、ただ物理的に過ぎ去っていく(彼女とは無関係に町が大きくなり、その姿を変えてゆくのがじつに印象的だ)。人間のいないモノ世界で、彼女自身も殆んどモノ化している。彼女を捕らえるのはニガヨモギをかじった後のような気味の悪い感覚だけだ。一本の瓶がある、雨が降っている、百姓が荷馬車に乗っている、一そうしたことをすべてを「理解はできる」が、それらは単なる事実すぎず、そこには何の「意味 СМЫСЛ」もない。意味とはこちらが能動的に付与するものであるのに、彼女にはそれを付与できるだけの統合的<力>、モノとモノを関係づける力がない。当然、何かに対して誰かに言うべき「意見」

もない。あるいはこのような底の抜けた無気力な状態に陥った時、人は既成の宗教に頼るのかもしれないけれど（ある種の宗教はできあいの力、できあいの中心を与え、「意見」を用意してくれる）、彼女にはそのような宗教もない。夫に影響されて徹夜禱にも行き、祭日には朝のミサにも通っていたが、彼女の信心も夫の死とともに消えてしまった。じゃれついてくる飼猫のブルイスカも、この味気ない世界を変えるものとはならない（逆に猫は彼女の世界の一部であり、その出現そのものが彼女の心の不安を象徴している¹⁷）。これはペットによって慰められる孤独な人間の話ではないのだ。彼女に必要なのは「全存在、全魂、理性」を捉えて、「考えや人生の方向」を決定づけてくれるような「愛」なのである。ある評者はおそらく主体性を最大の価値と考えてのことだろう、空虚になってしまったオーレンカを「ぼかんとだらしく」なってしまったと表現し、その「衰れ」を強調している¹⁸。空虚の時間は長く続くが、これはオーレンカにとって愛する相手は誰でもいいというわけにかなかったことを示している。彼女は何も選択しなかったわけではないのだ。

最終的に獣医の息子サーシャとの関係において明確に示されていることだが、オーレンカの本質的な特徴の一つは、相手が大人であろうが子どもであろうが関係なく、他人のことを心から気遣い、愛することができるということだろう。自身は愛情を与えるだけで（しかもまるごと、残すことなく与える）、その見返りは求めない。それは彼女が無欲であるというよりも、愛すること、そのこと自体によって、すでに<見返り>以上の賜物を受け取っていると考えたほうがいい。それはまさに愛する能力、さらに言えば、自分とはかけ離れた者を愛する能力（パペルニイの言葉で言えば「魂の能力」）である。『園丁主任の話』の「伝説」の医者がここで想い起こされる。「一体全体、町の住人たちは彼には他人で、血のつながりもなかったのに、彼は彼らを子どものように愛し、彼らのためには自分の命すら惜しみはしなかった¹⁹」。彼は患者をお金もとらずに診察し、彼らが死ぬとそのたびに、「奇妙なことに」泣きながら、故人の親類といっしょに棺の後ろに付いて歩いた。もちろん、このような聖者は伝説の中にしか存在しないのであって、現実を生きるオーレンカとは異なる。しかしチャーホフが『可愛い女』で提起している問題そのものは、『園丁主任の話』で扱われているのと同じく、相手を異性、あるいは大人、子どもに限ることなく、広く他人

を愛しうる能力なのである。「伝説」の医者に関しては分からないが、少なくともオーレンカにあっては、その愛する能力を十二分に発揮しないかぎり、彼女の生はまたたくまに凋んでしまう。

4. チェーホフの「女性」たちとオーレンカ

相手のことを心の底から気遣う、相手の関心事をそのまま、そっくり自分の関心事とする。そんなことができるのは、すでに触れたようにすばらしい性格の持ち主だが、しかし「伝説」ではいざ知らず、現実にはそのようなくすばらしい人は、世間的には愚かでどこか抜けている。いくら「大衆には道化芝居が必要なよ」と彼女がいくら大まじめに言ったとしても、それを聞く者は亭主の受け売りだとすぐに分かってしまう。人は熱心に話すオーレンカの言葉そのものに聞き入るのではなく、その熱心さの裏にあるものを聞き取るのだが、彼女自身はまったくそのことに気づいていない。「可愛い女」と呼ばれるのはこのような無邪気な愚かさがあればこそである。

相手の喜びを自分の喜びとし、相手の辛さを自分の辛さとする……。このようなことは『わが人生』のマーシャや『無名氏の話』のジナイーダたちにはけっして見出せない特徴であった。マーシャは民衆に奉仕するという高邁な目的をもった<ミサイル>を愛しはしたが、生身のミサイルは愛しきれなかった。ジナイーダはどう生きればよいのか、その答えをいつも男から期待しているが、相手が自分を導いてくれるものでないことを知ると幻滅する²⁰。そしてそのあとでは、何のためにあなたはわたしを愛したのかと問い詰め、自分を破滅させたのはあなただと、すべてを相手のせいにする。マーシャにしてもジナイーダにしても、自分たちの注ぐ愛情に対して何らかの見返りがほしかったのである。一方、オーレンカはひたすら愛するだけで、ただ愛することができさえすれば、それでよかった。

「彼女はつねに誰かを愛していたが、そうせずにはいられないのであった²¹」。「誰かに打ち込まずに1年と暮らせないのは明らかであった²²」。「彼女のほしいのは自分の全存在を、頭も心もすべてぎゅっとつかんでくれるような愛であった²³」。—このようなオーレンカの姿は「重荷」がないと生きていけないというラネーフスカヤに通じるところがある。彼女は相手がろくでもない男

だと心底わかっていても、これまでいくら裏切られていても、いま相手が病に倒れ、看病してもらう人もなく辛い目にあっていることを知ると、なにもかも放り出して男のいるパリに向かう。行けばまた同じことの繰り返りで、甘い言葉で大金をせびられ、病が癒えれば逃げられる、その可能性がきわめて高い。しかし彼女はいわゆる理性で考えてはいない。ただもう今彼の陥っている不幸に目をつぶることができない。そしてそのような不幸な男を愛さずにはいられないだけなのだ。そのことが頭だけで考えるトロフィーモフにはわからない。

『犬を連れた奥さん』のアンナ・セルゲーエヴナはどうか。アンナ・セルゲーエヴナとグーロフは恋によってお互いが変わってゆくが、オーレンカとその結婚相手はけっしてそうはならない。ここから、つまり、オーレンカの愛が人を向上させない愛であるということから、それは欲情のみの愛だと結論づける評者もいる²⁴。このような見方に対しては、愛のかたちは一つではないと言えないだろう。自分に結婚を勧める弟ミハイルに宛てたチャーホフは次のような手紙を書いている²⁵。「愛に基づいてのみ結婚は興味がある。その女性に好感が持てる (симпатична) からというだけで、その人と結婚するというのは、バザールでその品物がいいというだけで不必要な物を買うのと同じです。問題は、好感の持てる女にあるのではなく、愛を感じる娘にあるのです」。この部分だけを読めば、オーレンカの結婚は、グーロフとアンナ・セルゲーエヴナの結婚と比較して、なにかまやかしであるかのように思えてくる。しかし、この書簡にはこんな言葉も見出せるのである。「もっとも重要な推進軸(ヴィント)は愛であり、性的に惹かれることであり、肉の一致であって、その他はどんな賢い分別を働かそうと信用できるものではなく、退屈なものだ²⁶」。オーレンカは「やさしい」というだけではなく、彼女には性的魅力も十分備わっていた。カーテン越しに顔と片方の肩先だけをのぞかせているオーレンカの色気にクーキンは心を奪われ、プロポーズに踏み切った。結婚後もクーキンは「彼女の首筋や、ぽっちゃりと健康にはちきれんばかりの肩先につくづく気がついた時」、思わず可愛い女だとつぶやいている。—おもしろいことに、彼女を「可愛い」と感じるのは男だけではない。女性にとってもオーレンカは魅力的なのである。彼女の「何か愉快的話を聞くとその顔に浮び出る善良なあどけない微笑」をながめながら、婦人たちも、「可愛い人ね」と口に出さずにはいられない。オーレ

ンカの愛情は、女性たちにも惜しみなく放射されるものなのだ。それは二人だけの世界にこもるアンナ・セルゲーエヴナたちの相互愛（恋愛）とは別種のものである。

チェーホフは「相互愛」の欠如をこの小説で主張したかったわけではないだろう。そもそも『可愛い女』は結婚だけを描いた小説ではないのだ。結婚の問題を中心に据えたければ、おそらく小学生のサーシャをそこに登場させることはなかっただろう。彼女が深い愛情を注ぐそのサーシャはしかも、自身の産んだ子どもでもない。このことはここで取り上げられている愛が男女の相互愛よりもさらに根源的なもの、人間の存在そのものを支えているものであることを示している。チェーホフはここでいかに生きるべきかについての教科書を書いているわけではない。人間のあるべき理想の姿を指し示しているわけでもない。結婚後、喜びに満ちたオーレンカは「ふとり」（もともとぽっちゃりしていて「はちきれそうに健康であった」）、クーキンは「やせる」。結婚式当日の夜でさえ、雨が降って客の入りが悪くなるとすてばちになっていた彼だが、その後もずっと損をしているという思いにとらわれつづける。そのやりきれない思いを打ち消してしまうことは彼女にはできなかった。なるほどこうして見ると、彼女には相手を大きく変える力はないように思える。とはいえ相手は不幸になったわけではない。総じてクーキンたちはみなオーレンカと一緒に暮らして「幸せだった」のだ。少なくとも彼女と出会わなければ、彼らの生活はもっと味気ないものになっていただろう。あるいは獣医は時として、何度注意しても仲間内の会話にしゃしゃりでて、知ったかぶりの話をする彼女に閉口したかもしれない。サーシャにとっても、世話をやきすぎるオーレンカはわずらわしいにちがいない（「もう、ほっといてよ、お願いだから！」）。彼が成長するにしたがって、きっと彼女の存在はもっとわずらわしくなるだろう。しかし、一方的に愛を注ごうとする「母性的感情 *материнское чувство*」というものが、そもそもそういうものなのだ。サーシャに関して言えば、彼は自身を氣遣ってくれない実の母親というよりも、オーレンカといったほうがずっと幸せなのである。反抗はするだろうが、それでも彼はオーレンカとともに元気に満ち足りた日々をすごしている。もしもどこかで、何らかのかたちでオーレンカのもっているような母性的感情の恩恵を受けなければ、我々はみな心を病み、生きてゆく意欲さえ持ち

えないだろう。あたりまえの愛が「生」を支えているのである。恩恵を受ける側からすれば、時にわずらわしく思えることはあるが、生はこれなしには成立しないのである。世界を支えているのは高尚なイデーではなく、本来誰にも具わっているはずのこの人への「愛着 *привязанность*」である。サーシャ自身は感謝しないかもしれないけれど、サーシャたちがのびのびと育ってゆけるのは、彼らに向けられた義務ではない、感謝されることも期待しない誰かの強い「愛着」があるからだ。

<しなければならぬ>ではなく<したい>こと、<せずにはいられないこと>こそ生きる原動力である。排便や生殖、食物摂取など、生の存続にとって不可欠なもの、生を支える根源的なものには常に快感、喜びがつきまとう。人は、とくに幼児においては誰か身近な者に強く愛着し、誰か身近な者に強く愛されなければ生きてゆけないが、愛すること、愛されることも食物摂取と同様、また喜びなのだ（この喜びこそ、愛を取引の一種だとみなす『無名氏の話』のジナイーダに決定的に欠けていたものであった）。オーレンカの愛は最後に小さなサーシャに行き着いたが、これは当然の帰結であり、これまでの彼女の愛のかたちはここではっきりとした輪郭をもつようになる。サーシャはオーレンカが愛した獣医の子であるが、愛する人の子だから愛情を感じたというわけではない。彼女が手を差し伸べるのはなにより子どもが不幸な境遇にあったからだ。母親は夫婦の不仲のせいで彼のものを去っていったし、父親も獣医の仕事が忙しくてかまってくれない。それを見てかわいそうだと思う同情の念がまず湧き起こるが、そこにとどまって傍観しているのではなく、同情は一挙に愛情へと発展してゆき、その愛情がさらに熱を帯びて、ついにはそれなしには生きてゆけないほどの自身の生きがいになってしまう、—そのおそるべき能動性に真の彼女らしさがある²⁷。オーレンカはサーシャと出会うことで初めて、あるがままに、誰はばかることなく自己を思う存分に解放しえたのである。—「彼女がこれまでに覚えた愛着の中には、これほど深いものはひとつとしてなかったし、彼女の中で母性の感情がどんどん燃え上がってゆく今ほど献身的に、また何の欲もなく、大きな喜びをもって自分の魂を捧げる気になったことはなかった²⁸」。

他人の少年のために、彼の頬のえくぼのために、その大黒帽のためにオーレ

ンカは「喜び勇んで、感動の涙を流しながら」自身の全人生を差し出すことができる。「なぜだろうか」。このサーシャへの愛を語る場面には、パペルニイの指摘するように、ほとんどイロニーがない²⁹。他人の子どもに注がれる深い愛情。—ここで、ジナイーダが残していった赤ん坊をいとおしむ無名氏の言葉が思い出される(『無名氏の話』)。「わたしはこの〔オルロフとジナイーダの間にできた〕女の子を無我夢中で愛した。彼女の中にわたしは自分の生の延長を見た。そしてわたしがひよろながい、骨ばった、あごひげのある肉体を見捨てる時には、この空色の眼の中や、ブロンドの絹のような髪の毛や、こんなにも愛らしくわたしの顔をなで、わたしの首に抱きついてくるこのぽってりとした、バラ色のちっちゃな手の中に生きるだろうという、そんな気がした。というよりも、そのことをわたしは感じ、ほとんど信じていた³⁰」。男が母性をもつというのはおかしいが、他人の子どもへの愛着、血縁を超えた「母性的感情」は何も女性だけに特有のものではないのである。

さらに強調しなければならないのはオーレンカの滑稽にまでみえる変身能力だろう。劇場の支配人と結婚すれば、頭の中は芝居のことばかりになるし、材木管理人と結婚すれば、桁材だの、板割りだの、小割りだの、木舞だの、背板だのという我々には散文的にしか聞こえない言葉の中に「なんとなく親身な、しみじみとした響き」を聞き取るようになる。ここからオーレンカの自分というもののなさ、彼女の主体性の欠如だけを云々すべきだろうか。相手の関心が材木にあるからといって、いったい誰がこれほど積極的に材木の専門用語を学ぶだろう。このようなかたちで一所懸命に(献身的に全身全霊で)夫の仕事に関わる姿は滑稽である。考えだけでなく、言葉づかい、物腰、表情まで夫に似てくるのだが、これほどまで、思いをこめて人を好きになることもまた愚かで滑稽だ。しかしながら、愚かでなければ、自分を抜きにして自分以外の人間のことを考えつづけられない。愚かでなければ、すべてにおいて自分より他人を優先させるなどということはいえぬ。ある意味で彼女はムイシキン公爵(『白痴』)の仲間である。ドストエフスキイはキリストのような「美しい人間」を描こうとして失敗し、その結果『白痴』を書くことになった。チャーホフは『園丁主任の話』の中で、無条件に美しい人間を示しえたが、それはあくまで遠い異国の「伝説」の人としてであった。美しい人間は現実においては呼吸す

ることができない。伝説の中でしか語れないのである。金を取らない医者、死者に対して肉親と同じように涙を流す医者、そんな医者はいない。ムイシキンに遺産がなければならぬように、彼にも生きていく手立てが必要だろう。食べてゆくためのお金はどのようにして得るのか、人との付き合いはどうするのか、結婚はしないのか、等々。日々の雑事は美しさをだいなしにする。伝説だけでなく、現実においてあえて美しい存在を語ろうとすれば、どこかしら滑稽味の漂う人間にするしかないのだ。他人の苦しみを自分の苦しみとし、他人の喜びを自身の喜びとするなどということは、可笑しなことなのだ。自分を抜きにし他者をひたすら思うということは、まず自我ありきの近代的発想からすればへんてこりんで、それを思考しようとするれば、いきおい宗教的にならざるを得ない。しかし、この自と他のはらむ重大な問題をチャーホフは神に言及することなく、難解な言葉を弄することもなく、オーレンカという一見単純に見える具体的な形象を通して読者に提起した。

5. 「聖」か「愚」か

人々はなぜオーレンカのことを「可愛い女」と呼ぶのか。なぜ彼女はそんなに魅力的なのか。その答えの一つは、彼女が自分を愛する以上に人を強く愛しているから、である。さらに気遣い、心遣いがある。彼女と毎日接していた役者たちは、けっして彼女のことを悪く思わなかった。

「役者たちは彼女を愛し、彼女のことを『わたしとワーセチカ』、『可愛い女』と呼んだ。彼女は役者たちを憐れみ、彼らに少しずつお金を貸してやった。彼女がだまされる時もあったが、そのような場合でも、彼女はただ静かに泣くだけで、夫には訴えなかった³²」

ジナイーダ（『無名氏の話』）であれば激怒し、おそらく自分をだました男たちを許しはしないだろうが、オーレンカは怒らないし、夫に告げもしない（言えば、金にうるさい夫はすぐさまたました男を解雇するだろう）。すべてを自身の胸におさめて泣くだけだ。泣くのは、くやしいからではなく、金に困り、せっぱ詰まって卑劣な行為を行なってしまった者の心情を思いやり、心底かわいそ

うに思うからである。とはいえ、夫に内緒にしておくというのはある意味で、夫に対する重大な裏切りではないのか。『園丁主任の話』の医者をおもわせるこの一節をもう一度じっくり味わって読みたい。彼女はけっしてゴリキイの言うような、夫のいうがままになる可愛い「奴隷」ではないのである。何もかも夫の判断に頼っているわけではない。自身がちゃんと判断し、自分で押さえなければならぬ大本のところは押さえている。引き受けなければならない辛さはきちんと引き受けている。小さな「意見」は一方的に愛する人から受けとるだけかもしれないけれども、大きな「意見」は誰に借りることもなく、すでに身に具わっているのである。それはやさしさと言い換えてもいい。

オーレンカはだまされた。彼女をだますことなど赤子の手をねじるようなものである。彼女がだまされやすいのは安易に人を信じるからで、この点においてもやはり軽薄で愚かな御人好しであるとしかいいようがない。しかしそのように愚かであればこそ、そこにまた人間としてのすばらしさも宿る可能性があるのではないだろうか（美しい人間ムイシキンは滑稽な「おバカさん」でなければならない）。

ただこのような愚かさ、あるいは「軽薄さ」ともう一つの「愚かさ」「軽薄さ」とを混同しないようにしたい。わたしの考えているのは、たとえば『浮気な女』のオリガ・イワーノヴナである。彼女もオーレンカのように次々と何人もの人を好きになる。しかしそれはじつに表面的なもので、相手を純粋に愛したというわけではない。相手が有名人であるというただそれだけの理由で、彼女は彼らに強引に近づき、夢中になって時に恋心さえ抱くが、熱はすぐに冷めてしまう。「これまでの有名人たちが去り、忘れられると、代わって新しい有名人たちが現れるが、それにも彼女はすぐになれて飽きがくるか幻滅して、貪るように新しい有名人を、新しい偉物を探しにかけ、見つけたかと思うとふたたび探しはじめるのである。なんのためだろうか³³」。オリガたちはイメージゆえに相手を愛する。イメージのなかでも「英雄」、「民衆への奉仕」のために活動する人や「芸術家」といった、世間で高い評価を受けているものが特に好まれるが、なかには「人とは違った」特異な思想を持っている者が評価されることもある。いずれにせよ、彼女たちは相手そのものではなく、相手を材料にして自身が作り上げた＜美しい＞幻想を愛するのである。突き詰めれば、みな「ヒロイ

ン」としての自分自身を愛しているにすぎない。

最後にトルストイのカットした部分について一言触れておこう。彼は自身の文集に再録するに当って、なにより作者の主人公に対する皮肉な態度を消そうとした³⁴。「いかなる意見ももたないってことはなんと恐ろしいことか!」「あの女は悪くないな」「中庭のようにうつろだった」「まるでニガヨモギをかじったかのように気味悪く、苦かった」-このようなカットはオーレンカの色気(性的魅力、肉感的なところ)、滑稽さ、空虚さ、愚かしさを何とか減じようとしてなされたものであるが、なぜこれほどまでにトルストイがオーレンカの人間味を恐れるのか、理解に苦しむ。トルストイはオーレンカが血の通わない、非人間的な「聖女」であってほしかったのだろうか。聖女に祭り上げられたオーレンカにはさしたる魅力はない。そのような聖・オーレンカの母性の物語はくけなげな献身の物語>としての安易な感動を呼び込んでしまい、結果として、チャーホフが一番恐れていたであろう通俗に流されてしまうことになるだろう。

『可愛い女』が座りのいいハッピーエンドの物語ではないことは、子猫のブルイスカが最後に姿を現わすことから窺える。ブルイスカはオーレンカに愛する対象をなくしてしまった時に、彼女の孤独を癒そうと、ここにわたしがいますよと甘え、擦り寄ってきた。その時には相手にされなかったが、子猫はいつもオーレンカの傍らにいて、彼女が空虚に陥ったり、あるいは空虚になることへの不安を抱いたりした時を見計らい、出現する。その出現はとりもおさず、幸せな彼女のすぐ隣には空虚の深い淵が存在していることを暗示しているのではないか。

じっさいサーシャはいつ彼女から取り上げられるか、分らない。実の母親が、もう一度息子と暮らしたいと申し出てくる可能性はゼロではない。申し出があるとしても、今日いますぐにでもあるのか、明日か、それとも何十年先の話なのか、まったく分らない。ただそのような事態が訪れた時、またあの空虚が襲ってくることは疑いない。チャーホフはオーレンカの中に潜む不安、ひきつるような怯えを隠そうとはしない。-このことからまた、チャーホフがオーレンカを聖女と祭り上げられる非・人間でなく、我々と同じく出来損ない>の生身の人間として示そうとしていたことが分かる。

「空虚」はおそろしい。しかし、その恐ろしさを強調することだけが作者の意

図するところであつたとは到底思えない。それ以上に、「空虚」には積極的な意味も持たされているのではないか。アンナ・セルゲーエヴナとグーロフの恋を語る時にも、チャーホフは「人間の行く手に待ち受けている安息、永遠の眠り」に言及している。「空虚」も「永遠の眠り」もともに、我々の＜今＞が永続しないことを強調するものである。『犬を連れた奥さん』では「永遠の眠り」は「救い」でもあると記されていたが、オーレンカの「空虚」もまた、恐怖であると同時に、オーレンカの＜愛する能力＞と深く関わり、彼女の生を積極的に生み出す原動力のようなものと見ることもできる。再度、引用する。

「彼女には他人のこの少年、その両頬のえくぼ、ぶかぶかの制帽—そのためには、彼女は自分の命を投げ出しても惜しくはなかったろう。喜び勇んで、感動の涙を流しながら、命を投げ出したにちがいない。なぜだろうか。理由は誰にもわからない^{3 5}」。

誰か、誰でもいい、かけがえのない、自分より大切な者をもたない者は、さびしい人生を送らねばならないのではないか。—とはいえ、そのような大切な者をもっていたとしても、その者はいつ失われてしまうかもしれない。ブルイスカが近寄ってくる。空虚はオーレンカのすぐそばにあるのだ。あるいはこの空虚があるからこそ、彼女の今の大きな喜びもあるのだと、チャーホフは言いたいのかもしれない。

¹ スヴォーリン宛、1899年1月27日付書簡参照。—Чехов А.П. Полное собрание сочинений в 30 томах. Письма. Т. 8. М., 1980. С.52. (以下、本全集を『チャーホフ 30巻全集』と略記する)。強調は筆者。

² 『チャーホフ 30巻全集』作品篇、第17巻、33頁。

³ 同上、第10巻、103頁。(以下『可愛い女』からの引用はすべて『チャーホフ 30巻全集』作品篇、第10巻に拠る)。

⁴ 同上、108頁。

⁵ 同上、110頁。

⁶ 同上、112頁。

⁷ Лакшин В. Толстой и Чехов. Издание второе. М., 1975. С.84.

⁸ 『チャーホフ 30巻全集』作品篇、第10巻、413頁。

- 9 Лакшин В. Толстой и Чехов. Издание второе. С.85.
- 10 『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 10 卷、106 頁。
- 11 チェーホフ自身は「たくさんの厳格な御婦人たち строгие дамы は自分の小説に満足しなかった」と述べたという（モロゾフの回想による。同上、409 頁）。この場合「厳格な」とは、「世間的な道徳に縛られた」の意であろう。
- 12 同上、413 頁、参照。
- 13 Толстой Л.Н. Круг чтения. Том 1 / Сост. А.Н. Никитина. М., 1991. С.299.
- 14 同上。
- 15 Паперный З. Записные книжки Чехова. М., 1976. С.311.
- 16 ブストヴァーロフの場合に愛情を抱くようになったきっかけは、夫を亡くして辛い思いしている自分を気遣い、彼がやさしい言葉をかけてくれたからである。一方は違うが、ここでも＜同情＞から恋は始まる。
- 17 См.: Бицилли П.М. Творчество Чехова, в кн.: Трагедия русской культуры (Исследования, статьи, рецензии). Сост. М. Васильевой. Русский путь. М., 2000. С.257. ビツィリは、子猫ブルイスカとオーレンカには距離がなく、最終的に両者は一体化すると指摘している。彼によれば、子猫だけでなく、「オーレンカとオーレンカを取り囲むものの間には距離がない」。
- 18 佐多稲子「チェーホフの描く女性」（文芸読本『チェーホフ』河出書房新社、1979 年、72 - 73 頁）
- 19 『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 8 卷、344 頁。
- 20 「わたしたち女性は、自分の考えをもつ勇気がありませんの」と、ジナイーダはオルロフに向かって言う（『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 8 卷、177 頁）。オーレンカにはこのような発言をするだけの自己意識はない。総じてオーレンカはジナイーダたちより知的ではない。
- 21 『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 10 卷、103 頁。強調は筆者。
- 22 同上、108 頁。
- 23 同上、110 頁。
- 24 Лакшин В. Толстой и Чехов. С.92-94. 及び、佐藤清郎『チェーホフ 芸術の世界』（筑摩書房、1980 年、131 頁）を参照。
- 25 1898 年 10 月 26 日付書簡（『チェーホフ 30 卷全集』書簡篇、第 7 卷、311 頁）。
- 26 同上。
- 27 オーレンカは、獣医からうまくゆかなかった彼の家庭生活の思い出話を聞いたあと、夫婦の間に挟まって辛い思いをしている子どもの話を夫のブストヴァーロフに語っていたが、そうするうちに「考えが奇妙な方向に流れていって」、二人して子どもを授けてくれるようにと、神に祈りはじめた。—ここでも彼女は（この場合は夫もそうだが）単に＜同情＞にとどまることなく、それ以上に大きな愛情をそそぐことのできる対象を求めている。そしてその対象はあとで判明するのだが、自身の子でなくてもよかったのだ。
- 28 『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 10 卷、112 頁。
- 29 Паперный З. Записные книжки Чехова. С.311. オリガ（『浮気な女』）もオーレンカもわけのわからない力に突き動かされている。ただその方向が違うために、一方は「浮気女 попрыгунья」と呼ばれ、もう一方は「可愛い女 душечка」と呼ばれる。
- 30 『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 8 卷、209 頁。
- 32 同上、第 10 卷、104 頁。
- 33 『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 8 卷、10 頁。
- 34 См.: Толстой Л.Н. Круг чтения. Том 1. С.291-297.
- 35 『チェーホフ 30 卷全集』作品篇、第 10 卷、112 - 113 頁。